



誕生と死

佐佐木 邦子

そう遠くない昔、あちこちの土地に、お葬式には「縁の綱」を引く風習があった。私は引いたことはないが、子供のころ見たという知人は何人かいる。長い晒布を死者のお棺に結び付けて、親類縁者の女性たちがお墓まで引いていくのだ。引く、といっても、綱を握ってお棺と一緒に歩いていくのだが、もっと昔はこの晒で実際にお棺を引っ張っていったらしい。女性は男性よりもこの世とあの世を行き来する能力が強いと考えられていた。死者をあの世へ送り届けるためには女性の力が必要だという、古くからの信仰の現れである。

お墓に着いたお棺は土の下に埋められ、縁の綱に使った晒はお寺に納められる。そして女の人が妊娠すると、お寺からこの晒をもらってきて腹帯として巻く。どんな薬やお守りより安産に効果があると言われた。

誕生と死は、生きているものすべての最大の出来事だ。死んだ者と、これから生まれようとする新しい命が、縁の綱という一本の晒でつながっている。日本は西洋のように生の世界と死の世界が完全に遮断されているわけではないので、死者は常にこちら側の世界を見守っていて、何かのときには手を貸してくれる。だがその反面、あの世とこの世の境に悪い魔物が漂い出てくる可能性も多い。生まれてくる無力な命と、不安定な場にいる妊婦を悪い魔物から守るためには、産婆とか医者とか病院薬とか、こちら側の世界の力だけでは不十分だ。人の生死には、人の力を越えた大いなるものが関わっていると、少し昔の人は理屈以前に感じていた。

建前の幟旗についても似たことが言われる。山元町で、家の建前に使った幟旗をもらって腹帯に締めたというおばあさんの話を聞いたことがあった。腹帯といえばたいてい白だが、旗だから赤や緑の腹帯をしている人も多かったとか。建前は、建築工事の安全と、そ

の家で暮らす家族の無事を神様に祈る風習だ。家の神様の力が、まだ生まれていない赤ん坊にまで及ぶ。

私が子どもを産んだときは、妊娠五ヵ月あたりで腹帯をした。長い晒を二つに折ってぐるぐるおなかに巻きつけると、どこから見てももう完全に妊婦だ。重くて窮屈で変に気持ちが定まって、妊婦に居直るしか仕様がなくなる。今の若いおかあさんは晒の腹帯など使わないかもしれない。だが子どもを産む大変さは、いつの時代でも同じだろう。死者や家の神様や、あらゆるものに守られながら新しい命が生まれてくる。ひとりの赤ん坊の後ろには、気の遠くなるような遠い祖先からの祈りがある。お墓は、新しい命を守るもうひとつの場所だ。

2006.10 こもれび第2号